

# とくいく「禅語」三

## 喝（かつ）

禅の教えに一字関（いちじかん）とか一転語（いってんご）と呼ばれる言葉があります。この一字関（一転語）とは、その一言で相手を真理（真実の道理）に導く、気づかせる、悟らせるため言葉という意味です。

※真理（いつどんなときも変わる事のない、正しい物事の筋道）

その中でもっとも有名な一字関が「喝」です。時代劇などで寺の和尚が「喝ァ——ツ！」といった、あれです。一字関を放つことによって、迷いを吹き飛ばし真理に目覚めさせ契機とするということです。他にも一字関は「露（ろ）」「唳（い）」といった言葉など、いくつかあります。ちなみに、喝は、大声で叱ることで一気に大事なことに気づかせるという意味ですが、露は、大事なことが、目の前にあらわれているのだから、今、しっかりそれを見よという意味です。唳は、誤った考えを吹き飛ばして正しい道に導こうとするという意味です。そのどれもが「一言」で相手の境地を180度転じさせ導くことを目的として言葉なので「一転語」と呼ばれ、また、一言で悟りの関所を通過させようとする言葉でもあることから「一字関」とも呼ばれています。

また、禅の教えは「心を硬く難しくするものではなく、柔らかく明らかにすること」です。たとえば、ゴム鞠のように、外部からどんな衝撃が加わっても、一時（一瞬）は姿形を変えてへ込むけれど、すぐにもとに戻るような精神を維持しようというものです。粘土のように、いつまでもへ込んだままでは無く、ガラスのように砕ける硬さを求めるのではなく、柔軟なゴム鞠のような自由自在の「心」を求めるものです。

しかし、人は物事に囚われ執着し迷って真理（道理）に反した言葉を使い行動をしてしまいます。つまり、自分を見失い「良心」をなくして間違った考え方や判断をしてしまうということです。そういった心の内で自分を見失う原因となる迷いを振り払う言葉として、他者に対してだけでなく、自分自身に「喝ァ——ツ！」と吼えることも大事なことです。このような迷いを払う心の底からの叫びこそ、喝の神髄ではないかと思えます。

また、何事も深く悩み考えるということは、物事を為す上においてとても重要ではありますが、しかし、物事は頭の中に存在しているわけではなく、真実はいつだって目の前に存在しています。だからこそ、目の前にあるものを見よ。そして、そこに存在する事実（真理）をそのまま受け取りなさいと禅の教えでは説きます。考えることで迷いが生じてしまうような状態であれば、一旦考えをやめてみる。妄念（迷いの心、誤った思いつきから生じる執念、雑念）を振り払って、頭の中を空っぽにする。そしてそれが妄念であることに自分自身に気づかせる。その気づきに導いてくれる言葉が、一字関（一転語）と呼ばれる「喝」という言葉です。